

三位一体後第十五主日礼拝メッセージ

「愛してみないと分からない」

“ヨハネⅠ 4：7－12”

1 神は愛なり

今日の箇所には、新約聖書の中でも最も短く簡潔に神を言い表した言葉があります。「神は愛なり」このような言葉が生まれた所は、愛と平和に満ちた教会だったに違いない、「神は愛である」・・聖書の福音を凝縮したような美しい言葉。これは平安のうちに書かれたに違いない・・私たちはそう思ってしまいます。

しかし、事情は全く違いました。激しい葛藤の中に与えられた御言葉です。題には、「ヨハネの手紙 第一」とありますが、実はヨハネ教会の人々に向けて書いた説教だと言われています。手紙につきものの冒頭の挨拶の言葉や最後にある筈の別れの言葉・祝福の言葉がないから、説教ではないか？と言われているのです。

2 グノーシス思想

この説教が人々に説かれたのは、ヨハネの教会が深刻な危機にまわれていた時でした。危機の原因は「グノーシス思想」だと考えられています。グノーシス思想では、人間を「霊」と「肉」に分けて考えます。人間は、「霊」の部分で神と交わる。だから「霊」は善である。一方、「肉」にあたる身体的な部分は、人間を誘惑に誘う。だから肉体は悪だ・・というのが基本的な考え方です。肉体は悪、霊は善・・真っ二つに分けて考えるのです。このようなグノーシス思想は、当時のギリシャ・ローマ世界では広く受け入れられていました。そして、この考えは、ヨハネ教会の中にも入りこんできました。

「グノーシス思想」と聞くと皆さん、2000 年前の話で現代に生きる自分たちには関係ない・・・と思うかもしれませんが、しかし、そうではないのです。いつの時代も人間は、自分たちの考えから神を作り出してしまふ。現代に生きる私たちも、聖書から「神とはどういうお方か」を考えるのではなくて、自分たちに都合のよい神さまを考え出すのです。それは2000年経とうが全く変わっていません。

3 受肉の否定

グノーシス主義の考え方で、イエス・キリストの福音を見ていくと、どうなるでしょうか。都合の悪い事が出てきます。それは、「神の御子が人間となる」という事です。彼らにとって、誘惑を招く肉体は悪です。霊的存在の頂点にある神の御子が、どうして悪である肉体を持ってこの世に現れるでしょうか。ですから、御子イエス・キリストは、肉の体を持っていなかった・・・と彼らは主張したのです。肉の体と見たものには実態はなかった・・・という説が唱えられます。イエス様は弟子たちと共に旅をされたが、その時、イエス様の歩いた後には足跡がつかなかった・・・とかイエス様には影がなかった・・・とかいう話がまことしやかに言い広められました。イエス様の肉体は幻だから、足跡も残らなければ影もできない・・・というのです。

また、グノーシス主義の人々は、肉体の欲望を絶つための厳しい修行をしたと言われます。更に、神さまの秘密を知ろうと必死で勉強した人達もいました。その熱心さのあまり、彼らはこう考えるようになりました。「自分たちは、最高の神を知り、真の教えを理解している選ばれた人間だ。私たちのような理解をできない者たちは愚か者。愚か者と我らのような優れた者は付き合えない」と。

教会の交わりは破壊されていきました。グノーシス思想を支持する人々には、お金持ちや社会的地位の高い人が多かった・ ・とされています。彼らは修行や勉強をととても重視します。ですから、日々の生活に追われている庶民や貧しい人達についてはゆけません。グノーシス思想を持った人々は、そんな貧しい人達を馬鹿にするようになります。ついには、彼らは生活に困っている仲間に対してもなんの関心も示さなくなりました。

ヨハネの手紙Ⅰ 3章17節にはこうあります。「世の富を持ちながら、兄弟が必要なものに事欠くのをみて同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう」。使徒から伝えられた信仰を守ろうとする人々とグノーシス主義の人々。ヨハネ教会の中で深刻な論争と対立が起こりました。

4 教会の分裂

そして、ヨハネ教会からグノーシス派は出て行きました。ヨハネⅠの作者は2：19でこう述べています。「彼らはわたしたちから去って行きましたが、もともと仲間ではなかったのです。仲間なら、わたしたちのもとにとどまっていたでしょう。しかし去って行き、だれもわたしたちの仲間ではないことが明らかになりました。」

この箇所から、出て行った人たちを仲間と考えている人が、分裂後も多かった事が分かります。「もうあの人たちは仲間ではない」そう、教会の多くの人達が思っていたら、わざわざ書く必要はなかったでしょう。「もともと仲間ではなかった」敢えてそう書かなくてはいけないという事は、「出て行った人たちとも仲間だ」と思っていた人達がかなりいた証拠・ ・と言えます。

出て行った者たちと交流のあった人達もいたに違いありません。それはそうでしょう。人間的に親しい交わりを失うのは辛い事でした。分裂は、刃物で自分の体の一部を切り取られたような痛みを、

教会に残った人々に与えていた筈です。そして「いったい、出て行った人たちと教会の指導者たちとどちらが本当の事を言っているのだろうか」そのように迷う人達も、教会の中に少なからずいた筈です。

そんな教会の人々を見て、教会の指導者である作者は苦しみ、祈ったに違いありません。教会分裂という痛みに呻きつつ、深い淵の底から主に叫びをあげたに違いないのです。そして、「神は愛です」という言葉が与えられ、人々に語りかけるのです。神の御子・イエス・キリストの受肉を示し、「ここに愛があります」と宣言します。「互いに愛し合いなさい」と繰り返し勧めています。作者は、そこにイエス・キリストを信じる信仰の中核を見出しました。

5 神の愛を知る

では、それはいったいどのような内容でしょうか？その内容は、現代の私たちにどのような事を教えてくれるのでしょうかー

それは、「私たちが、自分自身と隣人を愛そうとすれば、神の愛を知ります」という事ではないでしょうか。勉強や修行だけで神の愛を知る事はできません。愛を知るには、愛する事しかありません。私たちが神を愛し、また、互いに愛し合う事によって愛なる神を知る事が出来るのです。

神様は、自分の被造物である人間を愛してくださいました。そして御子を送ってくださいました。だから、私たちが、自分と異なる存在を真剣に愛そうとする時、神さまの愛を知る事が出来るのであります。

6 他者を愛する

自分と異なる存在を愛する・・ここでの「愛する」とは、人間の勝手きままな欲望による愛とは異なります。相手の存在をあるがま

まに受け入れ大切にしていける事です。相手の存在をあるがままに受け入れ、報いを求めず大切にしていける一簡単な事ではありません。それはみなさんもよくよくわかりかと思います。

人間は、利己的です。自分も相手も利己的です。まだ、自分にとって都合よい存在であるうちは、大切に思う事も出来るでしょう。多少の事であれば、判り合おうとする努力もするでしょう。しかし、相手が自分を傷つけたらどうでしょう。自分に害を与える人を愛する事が出来るのでしょうか？ 相手を受け入れ、大切に出来るのでしょうか？

親が幼い子どもに対してこのような愛情を見せる事はたびたびあります。しかし、そのような親の愛情も、子どもが成長するにつれて容易に支配へと変わります。支配は愛情とは似て非なるものです。人間が人間に対し、無償の愛を貫き通す事は至難の業です。

ですから、人を愛する・・・という事を通じて葛藤や闘いが生まれます。自分との闘いが始まります。そして、私たちは、「ああ、自分はなんと醜いのだろう」と自分と相手の愛の少なさ、弱さ、愚かさ、醜さに直面します。罪を知ります。実に自分と相手の罪に直面した時、「互いに愛し合いなさい」という言いつけを私たちはどうして守る事が出来るのでしょうか？

だから、私たちは、イエス・キリストを見上げて祈らざるを得ません。まるで癲癇の息子を持つ父親がイエス様に向かって叫んだように。父親はイエス様に癲癇の息子を治して欲しくて、最初にこう言いました。「もしおできになるなら、この子を癒してください」。イエス様は答えます。「もしできるなら・・・というのか。信じるものは何でもできる」この答えを聞いて、父親は即座に叫びます。心の底からの叫びです。「主よ、信じます。信仰のない私を憐れんでください」。私たちも、自分が他の者を愛する事の出来ない惨めな者だと気づいて叫びます。「主よ、愛します。愛のない私を憐れんでくださ

い」このような叫びをあげざるおえない・・・それが私たち人間の罪の現実です。

しかし、叫びをあげるお方、その叫びを聞き届けてくださるお方がいるのです。愛のない罪の世界に閉じこもる必要はないのです。なんという慰めでしょうか。私たちが父なる神を愛し、互いに愛し合えるようになる為に主イエスは十字架にかかってくださったのです。その主がこの切なる祈りを聞き逃す筈はありません。

7 私たちを知ってくださる主

そして、主イエス・キリストは私たち一人一人を誰よりもご存じです。私は先週火曜日から金曜日まで実家のある大分に帰り、亡くなった父の事後の手続きや村の人、親戚への挨拶、荷物の整理などをしてきました。父の書いたものが沢山でてきました。判ったつもりになっていた父のこと。何も知らなかったのだ・・・という事に気づかされました。父の気持ちも考えずに親孝行の真似事をしていたんだ・・・後悔に胸がえぐられるような事もありました。どんなに親しくても、人間は他の人の事を理解できない・・・という事はありません、聖書の教えは本当です。しかし、主イエスは、父なる神は違います。私たちの心の底までご存知です。本人以上にご存知です。

そのイエスさまが人となられました。人間世界に遣わされた神の独り子です。彼には人間というものがよく分かったのです。そんなイエス様は、彼の愛に応えようとせず、自分を殺そうとする人間たちに対して、怒りも葛藤も悲しみも痛みも感じなかったのでしょうか。神の子だから、傷つかずにおられたのでしょうか。いくら教え導いても、ちっとも理解しない弟子たち。彼らに、苛立ちを覚えなかったのでしょうか。一いえ、弟子たちに苛立ちを覚えられ、お叱りに

なっています。「私はいつまであなた達と一緒にいられようか」とあります。

ユダから裏切られた時、イエス様は、平穏な気持ちで受け入れる事が出来たのでしょうか。一いえ、イエス様は、ゲッセマネの園で血の涙を流して神様に祈られたのです。愛した者から裏切られるとき、イエス様の心はナイフで切り裂かれたように生々しく傷つき血を流しているようでした。

勿論、イエス様は、私たち罪びととは違います。私たちのように自分勝手な動機で愛せない・・・なんて事はありません。しかし、自分勝手な動機がないからこそ、より一層、イエス様は苦しまれた筈です。人の罪が、私たちよりもはっきりとわかったからです。

神の子は人となりました。イエス様はすべての人を愛する事によって、深く深く傷つき悲しみ葛藤されたのです。隣人を愛そうとしたとき苦しむ私たちと同じように。神の子には、傷つかず、悲しまない存在としてこの世に来る・・・そういう選択肢もありました。グノーシス主義者が言うように、人の弱さを持たない神の子となる事もできた筈です。しかし、私たち人間がお互いに愛する事が出来るように、敢えて、私たちの弱さにイエス様もとどまってくださいました。古代の偉大な教父アウグスティヌスが言うように、弱さの中に私たち一人一人を尋ねもとめてくださるのです。

8 主イエスの深い愛を知る

「イエス様も人を愛する時、私と同じ葛藤、痛みを抱いていた」・・・そうです、その通り。しかし、受肉の恵みはそれだけではありません。イエス様に葛藤を抱かせ、悲しませ、傷つけたのは、私たち一人一人です。イエス様を悲しませた事など一度もない、私はいつも

イエス様が喜んでくださるような事しかやっていない・・・と断言できる人間がいるでしょうか。

自分が愛する人に「大切にされていない」と感じ、胸に痛みを覚えている時、考えてみましょう。自分もまた、イエス様に同じような思いを与えていた・・・という事を。私がイエス様の教えよりも、自分の感情や欲望を優先させたとき、イエス様は悲しんでいます。私を愛するが故にイエス様は悲しんでおられるのです。

馬鹿にされたと思って、痛みを覚える時に思い出しましょう。悔りあざける人々の声の中、十字架を担って歩かれた主を思い起こしてみましょう。主が痛みと苦しみを持って耳にした罵声は、私たち一人一人の声なのです。

自分が人に傷つけられた・・・と感じ、怒りを覚える時、考えてみましょう。自分はそれ以上、より以上、イエス様を傷つけてきた事を。ゴルゴダの丘に響いた釘を打ちつける音を再び聞きましょう。それは、私たちが主を釘づけにした音です。槌を握っているのは、怒りを胸に秘めた私たち一人一人なのです。

そのような想像に絶する悲しみや痛み、苦しみを与えられても、イエス様はこの私たちを愛する事を決してあきらめません。十字架の上まで、最後の最後まで、自分の胸の痛みを耐え、葛藤と闘いつつ、私たち一人一人を愛するという決断から決して身を引こうとはしなかったのです。最後まで神様に私をとりなし続けて下さったーそれが、真のひと、ナザレ人イエスです。ここに愛があるのです。まことの愛があるのです。

人間には、自分とは異なる者を愛そうとする事で、経験する痛みや悲しみ・苦しみ・葛藤があります。その痛み・苦しみ・悲しみ・葛藤から、イエス様の私たち自身への愛のほんの一部をこの身で知る事ができます。イエス様は、この何倍もの痛み・苦しみをもって、私を愛して下さったのだーそう聖霊を通じて示されるのです。

神とは、本来、人間の理解できない存在です。人間の延長線上に神がいる・・・という事はありません。だから、神が私たち人間の延長線上に降りてきてくださった事、それは「神の一方的な愛」としか言いようがありません。私たちは、自分たちの所に宿って下さったイエス様を通じてのみ、神さまを知る事が出来るのです。

御子イエスは罪を持たないお方です。御子イエス様の弱さは、私たち人間の弱さよりもはるかに強いものです。ですが、人間の弱さの延長線上にイエス様は確かにおりてきて、とどまって下さいました。そして、私たちの愛の限界をイエス様は突破して下さったのです。だからこそ、私たちは延長線上に留まって下さったイエス様を通して、神の愛を知る事が出来るのです。頭だけでしるのではない。私たち全身で神の愛をしる事ができるのです。

これが、9節「その方によって私たちに、いのちを得させて下さいました」という御言葉です。この「命」という単語は、「救われた命」という意味もあります。神の愛によって与えられたほんものの命です。それは、私たちがイエス様を通してお互いに愛し合おうとしない限り、理解できない命なのです。12節に「いまだかつて、誰も神を見たものはありません。もしわたし達が互いに愛し合うならば、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです」というとおりなのです。

お互いに愛し合おうとする事により、汲めども尽きない神の愛をより深く知る事が出来るのです。頭だけで知るものではありません。自分の心で思いで体で霊で、全存在で主イエス・キリストを知るのです。

9 人生を通した歩み

私たちは、お互いに愛し合う事がすぐにできるような存在ではありません。特に利害が対立している場合などはそうです。だから、私たちが、神を愛し、お互いに愛し合う・・・その事によって神の愛を知ることが、クリスチャンの一生の課題です。これで完成・・・なんて事はありません。そして、懸命に神を愛そうとし、隣人を愛そうとし、父なる神と子なる神を聖霊の導きにより知ろうとする歩みは、永遠の命につながっています。ヨハネの福音書には「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」とあるとおりなのです。愛である神をひたすらに求め続ける事、これが永遠の命です。

10 人生で最も大切なこと

先週、大分の実家の様々な用事を姉の息子、大学四年の甥が手伝ってくれました。優しい素直な子です。考古学が好きで来春、大学院に進みます。ですが、甥は教会に行った事がありません。今は両親や友人からの愛に囲まれて生きているからいい。だが、親元を離れた時、果たして大丈夫だろうか？甥を見ていて不安になりました。

私たちが人生を切り開いていく時、最も必要なものは一体なんなののでしょうか？生きていくのに一番大切なものはなんなののでしょうか？学問なのか、技術なのか、体力なのか、家族や友人などの人間関係なのか？富なのか、権力なのか、地位なのか？

いやそんなものではない。決定的な時、助けてくれるのは学問でも技術でも体力でも人間関係でも富でも権力でも地位でもない。この世の人は決定的に人間を救うものを知りません。しかし、教会にはその答えを知っている人たちがいます。信仰に生きるクリスチャンです。私たちは知っているのです。人生を切り開いていくのに最も大切なものは、「神の愛を知る事」。富や権力が豊かな人間を作り

上げるのではない、神の愛が人間を作り上げるのです。神に愛される事を知って初めて、自分と人を愛する事が出来るからです。そして、人を愛する事でまた、また神の愛を深く魂に刻みこむ事が出来ます。

11 「愛されるために生まれた」

教会の若い方々がよく歌う歌があります。「君は愛される為に生まれた」―歌詞の一部をご紹介します。「君は愛されるため 生まれた／君の生涯は 愛で満ちている。君は愛されるため 生まれた／君の生涯は 愛で満ちている。永遠の神の愛は われらの／出会いの中で 実を結ぶきみの存在が 私には／どれほど大きな 喜びでしょう」確かに愛されるために生まれた私たちです。

しかし、神と人に愛される愛を求めていただけでは、「自分は愛される為に生まれた」という実感を得る事はできません。実感が無いから、「もっともっと愛してくれ」と他者の愛を貪り求めるだけになります。神と人を愛する事によってのみ、より深く確かに、「自分は愛されるために生まれたのだ」と実感できます。神の愛を知る事に通じるからです。「自分は神に愛され、神を愛し、人に愛され、人を愛する為に生まれたのだ」という実感が、人に生きていく力を与えます。私たちの命は虚しい命ではないのです。

日本のまだ神の愛を知らない人々に、このことを宣べ伝えてまいりましょう。私たちクリスチャンには神からその務めを委ねられています。